

本願——念仏成仏の教え

小川 一乘

目次

■ 智慧から慈悲へ	1
■ 「智慧」とは何か	10
■ 智慧が本願となる	16
■ 舍利弗の帰仏	20
■ ご縁が私となっている	24
■ 無縁の慈悲	27
■ 死と入滅	31
■ 「愚・凡夫」の自覚	41
■ 誓願は不思議である	46
■ 念仏して仏に成る	53
■ あとがき	62

■ 智慧から慈悲へ

仏教というのは、仏法僧の三宝に帰依するところから始まっています。釈尊（仏）とその教え（法）、そしてその釈尊の教えに従っている者たち（僧）が三宝です。ところが、釈尊は八十歳で入滅されました。一番大事な仏宝が欠けたわけです。そのときはそれでも、釈尊の教え（法宝）はあるわけです。しかし、ここに非常に大きな問題があったのではないかと思います。蓮如上人の『御文』の第三帖九通目、親鸞聖人のご命日によく拝読される御文があります。

それ聖人御入滅は、すでに一百余歳を経といえども、かたじけなくも目前において、真影を拝したてまつる。また德音は、はるかに無常のかぜにへだつといえども、まのあたり実語を相承血脈して、

あきらかに耳のそこにのこして、一流の他力真実の信心いまにたえ
せざるものなり。
(真宗聖典八〇六頁)

「真影を拝したてまつる」、つまり、すでにご入滅になつておられるけれども、親鸞聖人のお姿を彫刻なり絵に描いて、そこで聖人のお姿を偲ぶということです。しかし釈尊滅後、釈尊のお姿を何かに刻んだり描いたりして礼拝することを、仏弟子たちはしなかつたのです。

大乘仏教が起こつてくるころ、すなわち釈尊入滅の後、三百年余りを経るまで、釈尊のお姿は彫刻にもされないわけです。例えば今から二千二百年以上前に、アシヨーカ王が作ったサーンチーの仏塔がございます。その周りの欄楯といわれる石の垣根の柱に釈尊に關わるさまざまなエピソードが刻まれています。そこに釈尊の姿はありません。釈尊が

覚りを開いたことを表すときには、釈尊の座つておられた菩提樹と金剛法座を描き出して、そこに釈尊がおられることをほのめかしているわけです。あるいはご説法、転法輪を表現しようとすれば、法輪を描きそれに皆が合掌している姿を描きます。象徴的なものを通してそこに釈尊を偲ぶ、釈尊の存在をほのめかすという手法がずっと続いているわけです。蓮如上人の「御文」にあるように、すぐに釈尊のお姿を刻んでもよいはずなのに、それをしなかつた。これはどういふことなのかということ。多くの宗教は、人間を超えた大きな力をもつた神を信仰します。ところが釈尊はそのような神の存在を説かなかつた、かえつて否定されたわけです。人間の幸不幸は神によって左右されるものではない、人間自らが発見し、築いていくものなのだというのが仏教の基本です。ところが

仏弟子たちは、釈尊が生きている間は、ひたすら釈尊の教えに従っていたために、入滅されてしまうと頼りとする存在がなくなってしまうわけです。そうすると釈尊を神に仕立てあげていく、人間を超えた存在に仕立てあげていくという方向をすぐ辿りだすわけです。ヒンドゥー教徒のタゴールという詩人は「人間を神にすることはできない。しかし仏教徒は釈尊という人間を神に仕立てあげることには努力した。その点について、仏教は間違っている」というような批判をしています。

したがって、釈尊の入滅後に、人間を超えた存在、神になった釈尊を人間の姿で刻むことは憚られたのではないか、という推測が一般的にあるのです。たしかにそういう面もあるでしょう。しかし私はもう一つ、仏宝としての釈尊はもうすでにいないけれども、釈尊のお覚りや説法と

いう情景を通して、人間の姿としての釈尊を偲ぶというよりも、釈尊を釈尊たらしめた真実を思い起こす、ということがあるように思います。つまり、釈尊の姿を刻むのではなしに実際の事績である覚りの情景、あるいは説法の情景というものの中にこそ釈尊を見ている。釈尊を人間の姿として刻み込んでしまうよりは、菩提樹に手を合わせ、法輪に手を合わすことによつて、釈尊の存在をより強いものを感じていった、そこに人間の姿を超えた釈尊というものを強く感じていった、そういうことがあったのではないかということを思うのです。

タゴールの言うように、釈尊を人間以上の存在に仕立てあげてしまつたとすれば、間違いだと思いません。しかしその伝統は現在でもあるのではないのでしょうか。「お釈迦さまは特別だ、我々とは同じ人間ではな

いのだ」、そういう発想が、ずっと大乘仏教の流れにあります。そして、私たちの中にも、釈尊は特別だという思いがないでしょうか。初期の仏弟子たちによってつくりあげられたイメージが、現在になってもなお残っているように思います。そこに、仏教の歴史における基本的な問題点があるのではないかと思うのです。

ところで、大乘仏教が起るようになって、釈尊の姿が彫刻されるようになっていくわけですが、そこでもやはり人間を超えた、神格化された釈尊像——具体的には三十二大人相（眉間白毫相みけんびやくこうぞうなどの身体的特徴）などが基本となっているわけです。『金剛般若経』こんごうはんによぎょうには「正等覚しょうとうかくしたまえる尊敬すべき如来たちの無上なる正等覚は、仏法より生じたものである。そして諸仏世尊も仏法により生じるのである」と説かれています。釈尊

を釈尊たらしめた仏法の真実性ということです。そうなりますと法宝と仏宝の区別がつかなくなってくるように思いますが、実際の法宝というのは言葉とか思想とかいろいろ異なる形で、具体的に私たちが接することのできる世間的な存在であり、その背後に法宝を法宝たらしめる法の真実というものを想定するようになってくるのです。釈尊を釈尊たらしめた、仏を生み出した根源的な真実、それを法身ほっしんと表現するようになっていく。そして、法身が具体的にこの世に姿を表したのは、仏宝である釈尊であると。

このように釈尊を釈尊たらしめた、この真実なる法身ということが初期の大乘仏教では大変大事にされています。そして中期の経典である『涅槃経』ねはんぎょうなどでは「法身常住じょうじゅう」と表現されています。肉身としての